

編集実行委員会便り

〈新春e-mail討論について〉

今回は、恒例の新春対談をe-mail討論に変更しました。編集実行委員会で、インターネット時代ならではのe-mail討論の試行は容易に賛同を得たものの、そのテーマ設定と本会としてのスタンスについては少なからぬ議論がありました。

まず人為起源地球温暖化論の真偽を議論することについては、科学的に公正に実行できればという条件付きでほとんど異論なく承認いただけました。しかし、討論結果が及ぼすインパクトは、従来から地球温暖化対策を真剣に検討してきた本会にとっても、また世間一般にとっても、決して小さくはないため、本会として今回の結果を今後にどのようにつなげていくかということには慎重を期すべきとの意見が出ました。確かに、IPCCの報告書に概ね従って動いている世界の大きな流れの中であって、今回の結果を、温室効果ガス排出に関する現在進行中の政策の研究や議論

にどのように反映すればよいのか、また一部では過剰とも思える予防保全の議論もあるものの真剣に行動を起こしているNPOなどのグループなどにも、学会としてどのようなスタンスでこの結果を伝えればよいかなども、討論に付随して多少なりとも検討・言及すべきことだったかもしれません。

しかし、コーディネーターを終えたばかりの筆者はその任にあらずと判断しました。ために、筆者からは本e-mail討論を純粹に科学的な追求というスタンスでのみお伝えさせていただき次第です。なお、編集締切に間に合わなかった討論の一部は次号にも継続する予定です。

吉田 英生

(京都大学大学院工学研究科航空宇宙工学専攻教授)

E-mail: yoshida@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp

〈特集について〉

原油価格は一時の異常なまでの高騰から下落してはいるものの、エネルギーを取り巻く状況がそれで改善したわけではなく、生活レベルを維持しながら2050年の排出ガス削減の目標を達成するためには、これからますます大変な状況を迎えることになるであろう。排出ガス削減の目標達成に向けてのエネルギー研究開発については、重要事項やロードマップが示されている。2050年というとまだまだかなり先のこと、という感じもするが、夏休みの宿題と同じで、ぎりぎりになってあわてても間に合わないので、ロードマップの道筋に沿いつつ、短期的な視野も持ちながら着実に研究開発を進めていかなくてはならないであろう。そして、前述した原油価格の異常高騰のような予期していなかったことは、今後も色々起こると考えられるので、そのような際にはロードマップを適切に軌道修正して対応していくことも必要であろう。また、最近、イノベーションという言葉が様々なところでよく目にする。排出ガス削減の目標を達成するためのエネルギー研究開発においてもイノベーションが当然必要である。筆者も大学でエネルギーに関連した研究に携わる身として、イノベーションに結びつくような研究を行なうことができれば、と常々思っている。しかし、もちろんイノベーションに結びつく研究開発は容易に行えることではなく、やはりこれもしっかりとした土台となるものの上で着実な研究を行なっていくことが必要で

ある。

今回の特集は、水素エネルギーの製造、貯蔵、輸送技術の現状と展望に関するもので、その主旨等については特集の中にも書かせて頂いている。日本で水素エネルギーについての本格的な研究が始まってから30年以上が経過しており、その間にエネルギーに対する状況も変化してきているが、水素が二次エネルギーとして今後ますます重要になってくる、という認識はその当時も現在も同様に間違いのないことと思う。本誌で水素エネルギーを特集としてとりあげるのは約5年ぶりであるが、この5年間に技術は色々進んできているので、このあたりで、改めて水素エネルギーについての最新の状況を概観し、そこにある課題や将来の展望を正しく把握することによって、現状のような枠組みで今後も研究開発を進めていけばよいのか、あるいは、別の視点からの考え方を取り入れて、新たな枠組みで研究開発を進めて行く方がよいのか、等について考えてみる機会になれば、と思っている。そして、これから先の水素エネルギーの技術開発について、イノベーションをもたらすことができるようなヒントをそこから得ることができれば幸いである。

桜井 誠

(東京農工大学大学院共生科学技術研究院准教授)

E-mail: sakuraim@cc.tuat.ac.jp